

ありませんよ。そんなことを云つたなら、あなたの良人が羞しがるぢやありませんか」

五

窓の燈火が遠くなつた。梶はあれほども浮き浮きとして道化てゐたにも拘らず、急に黙つて歩き出した。愛するものが黙り出すと、愛される者は恐れ出す。町子は梶が何故黙り出したのか心配になつて來た。

「何ぞ黙つてらつしやるの？」

梶は答へなかつた。

「ね。何を考へてらつしやるの？」

町子は梶の横顔を見上げて見た。星が一つ彼の高い鼻の頂きで光つてゐた。町子は梶が自分の悪い性癖を考へ出してゐるではないかと考へた。

「ね、あなた、黙つてちやいやだわ。何だか私、自分の悪い所ばかり考へてゐられるやうな氣がするの。ね。私にどこかお氣に召さない所があつて？ 御免なさいな」

「僕は實際おつちよこちよいに見えますか？」と梶は云つた。

「あら、そんなことを考へてゐらしたの」

「あんなこと嘘よ。冗談ぢやないの」

「僕はこれから嚴肅になるんです」

「いやだわ。私、嚴肅なんて大嫌ひよ。豪くもないのに、豪さうな顔をして。私、おつちよこちよいの方がいゝわ」

「ぢや、僕はおつちよこちよいなんですわ」

「あら、さう云ふんぢやなかつたの。あなたには困つてしまふわ」

「いや、まアそれはどうでもいゝですがね。自分の愛人からおつちよこちよいに見られるほど不名譽ななさない話はありませんね。うかうか愛情さへ出すことも出來やしないぢやありませんか。とかく若者と云ふものは、愛情を多く感ずれば感ずるほどおつちよこちよいになるものなんですよ。おつちよこちよいと云ふことは、嚴肅と云ふことよりは、はるかに人生を柔かく氣安く愉快に輕快に延々と平等に自由に美しく」

「私、あなたをおつちよこちよいだなんては思つてやしませんわ」

「いや、思つてる」

「いやだ」

「嚴肅と云ふことは われわれの心に鏡前をがちりと降ろし、窮屈でしかつめらしく、眞情を

吐露せず質屋の藏のやうに傲岸でみせかけで、馬鹿馬鹿しく石のやうに壓倒的で貴族のやうにからつぽで」

「もう分つてよ」と町子は云つた。

「あなたには分つてゐない。一度かう云ふことを教へておかないと、以後僕は困るんです。青年と云ふものは、愛人の欲する性格にならうとする傾向性を持つてゐるんです。あなたが嚴肅を欲するなら、僕は無理にでも嚴肅になつて行くだらう。それが始終續いて行くと、もし僕が強い性格ならあなたをだんだんと厭になつて行くのです」

「いやよ。そんなこと」

「だからです。女性と云ふものは一番正しいことを欲しなければいけないのです。もし女性が正しいものを欲するなら、その愛人なる僕たちはきつと正しくならうとし、正しくなつて行くにちがひないのだ。もし女性が下劣なものを欲するのなら、いつまでたつても世の中は美しくなりはしないのです」

「だから、私が下品だと仰言るんでせう。もう分つてよ」

町子はふんとし始めた。

「怒つたんですか？」

「しつこいわ」

「あなたはしつこいのが嫌ひですか」

「ええ」

「覚えてゐたまへ。僕はあなたに、以後、極めてあつさりとやつて見せます」

「いやよいやよ」

梶は黙つてゐた。

「ね、いやだつてば」と、町子は、梶の肩へ自分の肩を擦りつけていった。

六

「ね、あたしには随分いけない所がありますわね」と町子は云つた。

「少々ありますね」と梶は答へた。

「云つて頂戴な。これから氣をつけますから」

「云つたらあなたは怒りますよ」

「怒りやしなくつてよ。自分のためになるんですもの」

「所が、それがなかなかさうでないんです」

「ほんと。私、あなたのお氣に召すやうにいたしますわ」
 「馬鹿に優しいことをいひますね」

「ね。云つて頂戴よ」

「たまに優しく出られると恐ろしくなるものでね」

「ぢやいゝわ」

「ぢやいひませうか。ひとつ」

「もう澤山」

「いひますよ。先づ第一に、あなたはあまり美しくすぎる」

「知らない」

「どうです。それが第一の缺點で、第二には、さうですね。僕をあんまり輕蔑しすぎますよ」

「あら、私、いつあなたを輕蔑して？」

「さういふことは、あなた自身に訊くことです。第三に、あんまりあなたは夢を見過ぎる」

「私か？」

「左様」

「あら、ひどいわ。私、どんな夢を見過ぎて？」

「さらにありますね。説明はどうも手にとるやうにあり過ぎて選擇に困りますが、先づ一例として、いゝ生活を夢見過ぎます。別荘とか、自動車とか、洋行とか、夜會とか」

「だつてそんなことならいゝぢやありませんか」

「いいにはいい。だが、最も困るのはあなたの良人となる人です。夢を見られては、その夢をこちらが打ち壊しはすまいかと心配で、心配で、絶えずはらはらしてゐなければならぬんです。すると、もう良人は非常にあなたが重荷になつて來るのです」

「重荷になつたらお捨てなさいよ」

「何ぜさういふことをいふのです？」

「だつて、重荷になるつて仰言つたぢやないの」

「だから説明してゐるんぢやありませんか」

「さうぢやないわ。あなたは私をいつか捨てるつもりなんだわ」

「ぢやもう僕は何もいはない。今さきにあなたは怒らないつて約束したぢやありませんか」

「怒つてやしないわ」

「いや、怒つてる」

「嘘よ。私、聞いてるんだわ」

「ほんとうですか」

「ええ」

「ぢや、もう一ついつてもいいですね」

「ええ」

「あなたは自分の云つたことを直ぐ忘れて了ふ性質を持つてゐますよ」

「私、覚えてゐてよ。ちやんと覚えてるわ。あなたぢやありませんか。あなたは直ぐ御自分の云つたことを忘れて了ひなさるのよ」

「いや、僕は忘れてもいいことを忘れるんです」

「私もさうだわ。忘れてもいいことを忘れるんだわ」

「それにあなたは、怒りつぽい。直ぐもう心の平衡がなくなつて、感情でばかり言葉を云ひます。生れてからよく考へて物事をしたり云つたりしたことがないやうですね」

「知らない」

「知らなくては困る」

「私、もう歸りたいわ」

「それ、それが今僕の指摘してゐるあなたの缺點なんです。然も重大な缺點だ」

町子はもう聞きたくないといふやうに、急に両手で自分の耳を壓へ出した。梶は町子の耳から手を取り去けやうとした。

「いや、いや」と町子は云つた。

七

梶は無理に町子の耳から彼女の両手を引きとつた。そして、彼は彼女の耳もとへ口をよせて、

「一番あなたの重大な缺點は」と云ひかけると、

「知らない、いや、いや」と町子は云つた。

「僕を愛しないと云ふことだ！」

「あなたよ。あなたよ。あなたは私を愛したことがないわ」

町子はさつと梶から身を退けた。梶は彼女の方へ肉薄してその肩を攫まへた。町子は彼を跳ねつけやうとしてよろよろつとすると花畑の中へ足を踏み込んだ。

「あなた、嫌ひよ！」

「僕も嫌ひだ」

「ぢや、丁度いゝわ」

「いや、僕も嫌ひだと云ふのは、僕も僕が嫌ひだと云ふことですよ、何んの、僕があなたをどうして嫌ひになるものか。あなたのやうではありません。此の點、あなたより僕の方が威張れるんです」

「知らない」と町子は叫んだ。

「どうしてどうして。僕があなたを飽くまで好きで、あなたが僕を時々好きだとすると、差引損をするのは此の僕だ。僕はあなたを愛することは、以後もうやめだ」

梶は町子のやうにふんと反り身になつてひとり先に歩き出した。町子はいくらか拗ね損つた形で急にしほしほと従いて行つた。二人はそのまゝ暫らく黙つて歩き續けた。

「梶さん」と町子は呼んだ。

梶は返事もせずに空に向つて口笛を吹き出した。

「梶さん。あたし、歸つてよ」

「どうぞ」と梶は云つた。

「ぢや歸るわ」

町子はひとり梶とは反對の方へ歩き出した。

「町子さん」梶は初めて歩みをとめて振り返つた。

彼女は返事をしなかつた。

「町子さん、一寸、用事があるんです」

「何アに」

「一寸」

「あなた、ここへいらつしやいよ」

「あなたが来たまへ」

「いやだわ」

梶はいまいましたさうに町子の傍へ近寄つて行つた。

「どうして僕はこんな喧嘩をするんでせう」

町子は日向葵の葉を撈つて黙つてゐた。

「あなたは考へたことがありますか。ね。これぢやとても見込みがありませんよ。僕はつくづく厭になつたんです」

すると町子は急に泣き出しさうな顔をした。

「ね、僕は結婚しようと思ふ前から、もう喧嘩ばかりしてるぢやありませんか。愛すると云ふことは喧嘩をすると云ふことなんですかね」

「私が悪かつたのよ。私、どうしてかうなんでせう」と町子は睨り上げながら云つた。

梶は黙つて了つた。

「勘忍して下さいな。ね、ね」

町子は悲しげに梶を見上げて云つた。しかし、梶は憂鬱さうに眉を蹙めて空を仰いだまゝ黙つてゐた。

町子は梶の胸へ顔を擦りよせて泣きつゞけた。

「とにかく困つたことだ」と、梶は低く呟くやうに云つた。

「いやよ。そんなこと、考へないでね。ね、梶さん。私、あなたにそんなことを思はれるのはいやなんですもの」

梶はなほも悲しげな顔をしながらかしだんぐと胸は喜びに躍り出した。

「いや、僕はあなたのお父さんや、お母さんに濟まないんです。今からこんなだと思ふと、考へて見給へ」

「だつて私、悲しくなつちやつたんですもの。あなた、私の悪口ばかり仰言るんですもの」

「でも、あなたが云へ云へと云つたんぢやないですか」

「だつて、だつて、私、あなたがそんなに私をつまらない女だと思つてゐらつしやると思は

なかつたわ」

「あはゝゝゝゝゝゝ」と梶は笑ひ出した。

八

町子は大笑ひをしてゐる梶の顔を見てみると、今泣いた自分が急に馬鹿らしくなつて來た。あれほど眞剣に泣いてまであやまつたのに！

「あなたつて、失敬な人だわ」

「なぜ、なぜ？」と梶は云つた。

「笑つてらつしやるんですもの。私口惜しいわ」

「笑つたつて、あなたを侮辱したことにならないぢやありませんか」

「狡いわ。私、ほんとうにあなたにあやまつたのよ。笑ひ事ぢやないわ」

「誰れが笑ひ事だと云ひました」

「ひとをさんざ悲しませておいて、まだあんなことを云つてらつしやるわ」

「いや、僕はね」

「何とでも仰言い」

「僕は喜んでゐるにんぢやありませんか」

「喜んで笑つたのと、冷やかして笑つたのと、私に分らないと思つてらつしやるんでせう。私、口惜しいつたらありやしないわ」

「いや、さうぢやない。困つたね。僕の笑つたのは」

「よくつてよ。もうそんな説明はきゝたかないわ」

「僕の笑つたのは、つまり、あなたがあまりしをらしかつたからですよ」

「嘘おつしやい」

「いや、嘘ではない。今のやうにあなたの泣いたのは嘘ぢやないと思つてゐたからです」

「まア」

「あなたの泣いたのは嘘ですよ。もう本當に泣いてまであやまつたのなら、今頃僕が少し笑つた位で怒る道理がないのです。あなたの最大の缺點は、そこにある。俳優的、お芝居的、技巧的、そのそこだ」

「口惜しッ」と町子は云ふと、唇を噛みしめて、梶の胸倉をひつ攫まへた。

「あつははッはッはッ、あつはッはッはッは」

梶は胸をとられながら笑ひ出した。町子は梶の身體を揺り動かした。

「ぢや、私、私、私、あなたがあなたの缺點を云つてあげるわ」

「いや、僕はもう聞き飽きてゐるのです。僕からお望みなら申しあげますよ。僕はあなたを愛しすぎるのです。あまりに、あまりに」

「嘘、嘘、仰言い」

「いや、そのため、あまりにあなたに増長させたのです。それが僕の第一の缺點だ！」

「まア、あなたは！」

「いや、事實、そのため首を締められるやうな破目にまでなつたのです」

「あなたは、あなたは」

「僕はあまり甘すぎるのです」

「あなたは嘘つきで、冷淡で、見せかけで、口が上手で」

「品行方正で、頭腦明晰で」

「威張りやで、利己主義者で、己惚れで、そして、あなたは」

「聰明で」

「嘘おつしやい」

「博學で」

「あなたは高慢ちきで、放蕩もので、詭辯家で、出鱈目で、術學的で、夢想家で」
 「愉快な男になりましたね」

「それにあなたは、女たらしよ」

「それぢや、あなたとは比較にならない悪者ぢやありませんか」

「え、さうよ」

「ぢや、あなたの良人にはとてもなれる資格がない。失敬します」

梶は町子の傍から放れて行つた。町子は暫らくひとりそのまゝぢつと立つてゐた。すると、自分の愛人を罵つた後悔の淋しさが急に彼女を襲つて來た。しかし、そのときは早や梶の姿は見えなかつた。

九

町子は二人で來た花壇の中を引き返へした。彼女はもう一度梶に會ひたかつた。もし今夜のうちに逢つておかないと二人の争ひが此のまゝいつまでも續きさうに思はれた。彼女は二度と梶に逢へない場合を想像した。すると彼女は堪らなく淋しくなつた。淋しくなればなるほど、なほ彼女は最早梶とは事實逢ふことが出來ないやうに思はれた。

「私、どうしたらいいかしら。ほんたうに梶さんは怒つてらつしやるんだわ。だつて、誰だつてあんな事を云はれたら怒るにきまつてゐるわ。私、なぜあんなことを云つたのかしら。私、あんなことを云ふつもりなんかなかつたんだわ」

彼女は涙が流れて來た。彼女は今はもうぢつとしてゐることが出來なかつた。一刻も早く梶に逢つて自分の無禮な仕打をあやまりたくなつて來た。

「だつて、私、仕方がなかつたんだわ。あんなにひどいことをいふんですもの。俳優的だなんて。私、ほんとにさうなのかしら。でもあの方だつてさうよ。その場かぎりのことばかり云つてらつしやるんだもの。私があんなこと云つたつて腹が立たない筈だわ。私何て云つたのかしら。でも云ひすぎたわ。術學的だなんて。まア、あんなこと、どうして私云へたのかしら。お氣の毒だわ。私、無茶苦茶を云つたんだわ。怒つてらつしやるわ。きつと、もうお逢ひして下さらないわ。今頃どうしてゐらつしやるかしら。ほんたうに、私、どうしたらいいかしら。私、馬鹿よ。もうこれでお終ひよ。あの方は私を愛して下さつたわ。接吻なんかして、まアほんたうに、あの方つてどんなに私を愛して下さつたでせう。それなのに、私つて、あんな悪口を云つて、ひどいわ、ひどいわ。私、どうしようかしら。でも、私だつてあの方を愛してあげたわ。あの方よりもつともつと、私の方がずつと一生懸命だつたわ。それなのに、あの方つて

私を考へなしたなんて、ひどいわよ。私、さうぢやないわ。私、あの方をどんなに愛してあげたでせう。いつだつて、私あの方のことを忘れたことつてあるかしら。昨日飛行船を見たときだけよ。だつてあの時は仕方がなかつたんだわ。あんまり大きな音がするんですもの。音なんかしなかつたら見やしなかつたんだわ。それなのに。あの方つて私が愛したことがないんだつて、私あんな悪口位何んでもないぢやないの。私、口惜しいわ。私、あの方にさういはなきアられないわ。どこへ行つてらつしやるのかしら。逢つて下さるかしら。私、こんなに愛してゐるのに、こんなに、こんなに」

町子は花壇を抜けると芝生の中を横切つていつた。ベランダからは明るい光りが緑の芝生の上へ流れてゐた。彼女は梶の姿を見附け出さうとして庭の中を歩き廻つて見たが、彼の姿は見られなかつた。彼女は直ぐ建物の中へ這入らうとして二階の露臺を仰いで見た。すると、梶は垂れ下つた羊齒の吊鉢の下で一人の若い女と話してゐた。

「あら」

町子は立ち停つて露臺の上を見詰めてゐた。

「失敬だわ。失敬だわ」

彼女は自分の姿に氣附かれないうやうに建物の影に身を隠した。胸が激しく動悸を打つて、隠

れてゐるのに誰れかに聞きつけられはすまいかと心配されたほどだつた。

「まああの女は誰れかしら。あんなに媚態を作つたりして、憎らしい。あらあら、梶さんてば、あんなに親しさにしてゐるわ。まあいやだ」

町子の顔は建物の影に埋もれながらだん／＼赤くなつた。

「でもあの女の鼻は少し低いわ。私の方がもつと高いわ。眼だつてさうよ。私の方が大きくつてずつと美しいわ。負けやしない」

十

梶がバルコーンで話してゐる女は、彼が友人の家へ遊びに行つたときそこで逢つたことのあるN子と云ふ女優であつた。

梶は花壇の中へ一人置いてきた町子のことが氣にかゝつて、ならなかつた。しかし、彼にいても、いかに寛大になり得たとして、「術學的」と罵られたことだけは赦せなかつた。もしこれが友人であるなら絶交すべきことは當然であつた。だが、町子が云つたとして見れば、それは、彼女が「術學的」と云ふ語義も知らずに、たゞ悪さうなことにもちがひないと思つただけで矢鱈と悪さうな名詞を並べてみたに過ぎないといふことも分つてゐた。しかし、それにしても、

さう云ふ不埒な言葉を投げつけられたといふことは彼にとつては痛かつた。何ぜかといふと、彼は少々、自分自身を術學的と認めざるを得なかつた。もし怒れば、胸を突かれた痛さがなくなるからだ。これは自身にとつても得策だ。しかし、梶としてもいつまでも腹を立てゝゐるわけにはいかなかつた。たゞ腹を立てゝゐるやうな顔をしてゐると云ふことは、それ以外に町子に對する戒めともなり、自身の價値を町子から高々と持ち上げてゐることに於て意義を持つた。だが、愛人に對して腹立しい顔を見せてゐるといふことは、とにかく二つのどちらの若い年月をそれだけ腐らせてゐるといふことは事實であつた。

「和解はすみやかにすべきである」

梶はさう云ふ結論に到着すると、直ぐ眼の前の女優をふり捨てるやうにして露臺から階下の庭の方へ下りて行つた。

町子は噴水の傍で湿めやかな石にひとり腰を下してゐた。アーク燈の光りは彼女のなだらかな肩に降りかゝり、その影は一叢の萩のしだれた葉の上に倒れてゐた。

梶は町子の傍へ近寄つて行つた。が、さて、言葉をかけようとする口が動かかなかつた。こちらから言葉を云へば、こちらが負けるやうに思はれたからである。

しかし、梶が黙つて町子の背後に立つてゐると、町子の肩はだんだんと圓まるやうに縮まつ

た。まだ町子はひと目も彼の方を向かなかつたが、明らかに梶が自分の傍に立つてゐるといふことを彼女が知つてゐるといふことは、彼女のその肩の物恐はさうな容子からでも充分に察することが出来た。が、それにも拘らず、町子はいつまでも黙つてゐた。かうして二人がどちかも意地を張り出せば、結局圖々しく牛のやうに強くなるのは女性である。梶はいらいらとして来た、腹立しさが再び強い力で押しよせて来た。その瞬間、彼はある根強い一つの哲學を感じた。

「かうしていつまでも恐らく生涯二人は小さな争ひを續けて行くのにちがひない。かうして父と母となり、かうして自分達は子供を産み、かうして自分達は老人となるのにちがひない」梶は急に淋しくなつた。此の無味乾燥な生活の中へ、一點の愉快な色彩を浮べるものは何か。と彼は考へた。それは毒を含ませぬ華やかな笑ひである。と彼は思つた。さう思ふと同時に、彼の頭の中へ閃き光つたものがあつた。彼は直ぐ手近の萩の草叢から一片の葉をとつた。そして黙つて、牛のやうに押し黙つてゐる不機嫌な町子の首篠へ葉を落した。

「あッ」と町子は叫びを上げた。と、彼女は狼狽へて両手で首篠を掻き拂つた。

「いやだわ、いやだわ、いやだわ」

町子は立ち上つて梶を睥んだ。

「毛虫ですよ」と梶は云つた。
 「嘘、嘘、何に！」
 町子は青くなつて叫びながら梶の胸へ突きあたつて来た。
 「あんまり澄ましてゐるからですよ」
 「とつてよ。とつてよ。失敬だわ！」
 町子はくるりと背を向けると、肩を動めかしながらぐんぐんと梶を押し来た。
 梶は後へ飛び退くと手を打つて笑ひ出した。
 「あはは、あははあはははははは。あははははは、あッはッはッはッ」

十一

町子は手を振り上げて梶を追つかけた。梶は脱兎のやうにひらりと萩の一叢を飛び越えた。
 「あはははは、あはははは。ここまでおいで、あははははは」
 町子は萩を避けると梶を蹴立てて馳け出した。梶は笑ひながら青桐の立木を楯にとつて町子の近づくのを待ち構へた。町子は梶の傍まで駆けて行くと、いきなり彼の手を攫まへやうとした。

「どつこい、その手は食はぬ」
 梶は再び身を跳ねて町子から放れると芝生の上へ馳け出した。
 「いやアよ。いいわ、いいわ。覚えてゐらつしやいな」
 町子はもう梶を追つ馳けようとはしなかつた。そのまゝ、ぶらりぶらりと足を引き摺つて、梶に油断を興へるやうに横を向きながら歩き出した。
 梶は芝生の中へ飛び込むと子供のやうに寝轉んだ。彼は初めて窮屈な重々しい感情が飛び去つたのを感じた。
 「これでいいんだ。つまり、俺も町子に媚びたのだ。町子も俺に媚びたのだ」
 實際、此の他愛もない二人の戯けた動作が互に媚び合つた技巧のたはむれに過ぎなかつたとは云へ、しかし、二人の絡まり合つた憂鬱さを切り開き、新鮮な喜ばしき情緒を吹き込んだのは事實であつた。われわれの生活に於て、何人と雖も動かすことの出来ない亂麻の諸々の出来事も一閃の機智のために、時として快刀の如く處理せられた美しき事實を見るではないか。
 「ワッ」といつて梶の上へ被つ冠さつた。
 しかし、梶は、今は彼女に攫へられねばならぬ時である、彼は町子を抱き寄せようとして腕

を彼女の肩へ延ばした。すると町子は露臺の上で若い女と親しさに話し合つてゐた梶の様子を思ひ出した。

「いや、いや。いやよ」と町子はいふと、急に彼の腕の中から擦り抜けようとした。

「どうしたんです？」

梶はまつたく意外であつた。まだ彼女が拗ね續けようとするのかと思ふと、彼は眉を蹙めてたゞ彼女の顔を見てゐるより仕方がなかつた。事實、彼は新しい一つの問題がまた二人の間に隠然と生じて來てゐるのだとは知らなかつた。

「私、もうあなたとお逢ひしないの」と町子は云つた。

「勝手にし給へ」

梶はもう心から腹立しくなつた。

「ええ、勝手にするわ。あなたのやうな、そんな薄情者なんかと誰れが逢ふもんですか」

「一體、此の争ひは誰が悪いのですか。それをよく考へて見ればいゝ」

「知らない」

「僕はもう腹が立つて來たのです。今だつて、實は僕が悪くはないのだが、こんな争ひはしてはならないと思つたので、それで僕はわざわざ僕からあなたの機嫌をとり來たのです。それ

を考へたつて」

「そんなことなんかどうでもいゝわ。さつきどなたと話してゐらつしやつたの。御自分にお訊きになるといゝわ」

「はゝア」と梶は云つた。

N子と話をしてみたところを見られたのだ。成る程、これは面白い。

「あれは女優のN子ですよ。御存知でせう？」

まアN子！ N子！ N子！ N子！ 町子は鐘を叩かれたやうに胸に響いた。しかし、彼

女はその胸の動揺を現したくはなかつた。

「いゝ方ね」と町子は静にいつた。

十二

梶は芝生の上に肘をつきながら町子の顔を眺めてゐた。彼女の容子は強いて落ちつきを示さうとしてゐるのは分つてゐるが、嫉妬の青い心が唇の片端にびりびりと現はれてゐた。

「こゝから、あの噴水を見てゐるとね、町子さん、一寸、あちらを見てみ給へ。水の濕りがあるなな遠くまで行つてゐますよ」と梶は云つた。

町子は芝生を撫手ながら俯向いて黙つてゐた。
 「一寸質問をしますがね。いいですか？」と梶はまた云つた。

町子は矢張り黙つてゐた。

「では質問をします。さつきあなたの仰言つたN子のこと、あなたの沈黙との間には何らかの相関係がありますかね？」

町子は急に梶の顔を見詰め出した。その眼は大きくきらきらと輝き、苦痛と怒りの複雑した心理の吐け口があるかのやうに暗澹として見えた。

「いいえ。私、なんとも思つてなくてよ。N子さんがどうなすつたと仰言るの」

「いや、それなら結構なんです。僕はまたあんな立話を見られたからは、何とか説明でも申し上げないと氣の済まない性分です」

「そんなこと仰言らなくたっていいわ。どうせあなたは私を馬鹿にしてらつしやるんですもの」
 「もし僕があなたを馬鹿にしてゐるのでしたら、あなたも僕を馬鹿にしてらつしやると云はなけりやなりませんね」

「どうして？ 私、いつあなたを馬鹿にして？」

「ぢや、僕はいつあなたを馬鹿にしました？」

「したわ」

「どう云ふ理由で？」

「あなたはN子さんを愛してらつしやるんぢやありませんか」

「さう云ふことになつて來るから、僕はちやんと説明しやうと云ふのです」

「御飯と理窟はどこへでも食つゝくわ」

「さう云ふ單純な理論を振り廻してはいけませんよ。僕がもしあの女優を愛してゐるのなら、あなたなんかにかうして機嫌をとりに來はしない。馬鹿な！」

「私、あなたは私ばかり愛してゐて下さるものだと思つてゐたわ」

「まださう云ふことを云つてゐる、一體いつになつたらあなたは賢くなるんです」

「え、私、馬鹿よ。いゝわ」

町子はぐるりと横を向いた。

「困る。あなたにも、僕は」

「ほつといて頂戴。私、いづれ馬鹿なんですから」

「馬鹿だッ！」

「知らないッ！」

「馬鹿！」
 「N子さんの所へ行つてらつしやいよー」
 「馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿」
 梶はいらいらして來ると町子の腕を握つて振り出した。
 「ああ」と町子は云ふと、芝生の上へ扉を伏せた。
 梶はどしやりと仰向きになつて空を見た。どちらもそのまゝ黙つて了つた。梶は町子を蹴りたくなつた。再び突然半身を起すと町子の伏せてゐる髪を見詰めた。
 「町子さん、どうしてあなたはさう分らないんです。もう僕を困らさないでくれ給へ。もう僕は、頭が痛くなつて來た。もう僕はたまらないんだ。一つ争ひが起ると、また直……ああ、もう僕は何も云ふのはいやだ。もう僕は今度こそ腹から腹が起つた。勝手にし給へ！」
 梶は荒々しく立ち上つた。町子は跳ねられたやうに頭を上げると、恐ろしさに青くなつて梶を見た。

實際、町子は和解を求めにつねに梶の傍へ行つたのだつた。それに、逢つて見ると 待つてゐたものは争ひであつた。何ぜか、町子は梶を愛してゐた。彼女は梶が自分を愛してゐると云ふことも知つてゐた。それに、二人は逢ふと、飲むべき薬のやうに、飲んだ薬は争ひであつた。しかし、争ひはたしかに二人にとつては薬であつた。一見、争ひは毒である。しかし、もしも二人の間に、この可憐な毒薬がないならば、恐らく二人は平和であつたにちがひない。しかし、平和は必ずしも幸福であらう筈はない。無風の平野には死に近づいた倦怠が潜んでゐる。争ひは必ずしも不幸でないのも定つてゐる。二人の間の争ひは、もしも二人が聰明であつたら、二度と同じ種類の争ひはしないであらう。彼等の間の争ひは絶えず質を變へて進化しながら、新鮮な平和を抱いて續けられるにちがひない。それは夜と晝とのやうにリズムを打つて來る満干の潮のやうに。

見るが良い。此の平凡極まる眞理を體得してゐるかのごとく、梶を追つて町子は馳けて行くではないか。
 「梶さん」
 「もうあなたに用はない」と梶は云つた。
 町子は振り捨てやうとする梶の手を持つた。
 「あなた、あやまりなさいな」

十三

町子は和解を求めにつねに梶の傍へ行つたのだつた。それに、逢つて見ると 待つてゐたものは争ひであつた。何ぜか、町子は梶を愛してゐた。彼女は梶が自分を愛してゐると云ふことも知つてゐた。それに、二人は逢ふと、飲むべき薬のやうに、飲んだ薬は争ひであつた。しかし、争ひはたしかに二人にとつては薬であつた。一見、争ひは毒である。しかし、もしも二人の間に、この可憐な毒薬がないならば、恐らく二人は平和であつたにちがひない。しかし、平和は必ずしも幸福であらう筈はない。無風の平野には死に近づいた倦怠が潜んでゐる。争ひは必ずしも不幸でないのも定つてゐる。二人の間の争ひは、もしも二人が聰明であつたら、二度と同じ種類の争ひはしないであらう。彼等の間の争ひは絶えず質を變へて進化しながら、新鮮な平和を抱いて續けられるにちがひない。それは夜と晝とのやうにリズムを打つて來る満干の潮のやうに。

見るが良い。此の平凡極まる眞理を體得してゐるかのごとく、梶を追つて町子は馳けて行くではないか。
 「梶さん」
 「もうあなたに用はない」と梶は云つた。
 町子は振り捨てやうとする梶の手を持つた。
 「あなた、あやまりなさいな」

「何を僕があやまるのです」
 「あやまりなさいよ。あなたが悪いのよ」
 「あなたが僕にあやまつたら、あやまりますよ」
 「私があなたにあやまる必要がないわ、あなたが雨子さんを愛してゐらつしやるぢやありませんか」
 「馬鹿らしいことはもういゝ加減にしておいてくれたまへ」
 「あやまりなさいよ。あやまりなさいよ。さア、こゝへ手をついて」
 町子は無理矢理に梶の手を芝生の上へ引き降した。
 「さア、早く、私が悪うございました、以後決してあのやうなことをいたしません、つておつしやいよ」
 梶は犬のやうに這はされながら、
 「君も云ひたまへ、一緒に云はなきやアいやだね」
 「私はいやよ、私は」
 「ぢや、やめだ」
 梶は立ち上らうとした。

「ぢや、私も、云ふわ」町子は梶と頭をくつゝけて芝生の上へ對坐した。
 「いちにいさんと云ふのよ」
 「何て云ふんです」
 「私が悪うございましたつて」
 「實に馬鹿にしてるね」
 「云はなきアいやよ。いち、にい、さん」
 「私は」と梶は云つた。
 町子はくつゝつ笑ひ出した。
 「何ぜあなたは云はないんです」
 「云ふわ。私は、そら云つたぢやありませんか」
 「それだけなら僕も云つた」
 「ぢや、もう一度よ、いち、にい、さん」
 然し、どちらも息を飲込んだ丈で黙つてゐた。そして二人は食つけ合つてゐる顔を見合せた。
 「もう云ふのがいやになつた」と梶は云つて頭を上げた。
 「ひどいわ、ひどいわ」

「何を僕があやまるのです」
 「あやまりなさいよ。あなたが悪いのよ」
 「あなたが僕にあやまつたら、あやまりますよ」
 「私があなたにあやまる必要がないわ、あなたが雨子さんを愛してゐらつしやるぢやありませんか」
 「馬鹿らしいことはもういゝ加減にしておいてくれたまへ」
 「あやまりなさいよ。あやまりなさいよ。さア、こゝへ手をついて」
 町子は無理矢理に梶の手を芝生の上へ引き降した。
 「さア、早く、私が悪うございました、以後決してあのやうなことをいたしません、つておつしやいよ」
 梶は犬のやうに這はされながら、
 「君も云ひたまへ、一緒に云はなきやアいやだね」
 「私はいやよ、私は」
 「ぢや、やめだ」
 梶は立ち上らうとした。

「あまり馬鹿らしすぎる」
 「ぢや今度こそよ」
 「いや、今度こそやめた」
 「狡いわ、狡いわ」
 「もし僕があやまつたなら、あなたは、そらく／＼ほんとうにN子を愛してゐたんだと云ふに定つてゐるんです。僕は嘘だからあやまらない。本當であつて欲しいとあなたが思ふのなら、僕はあやまりますよ」
 「いやいやいや／＼」と町子は身體を横に振り出した。
 「ぢやね。どちらもうあやまることはやめにして、その代りに、うん／＼これからもつと喧嘩をしようぢやありませんか」

十四

「私、もう喧嘩は大嫌ひ」と町子は云つた。
 「所かその喧嘩を持ちかけるのが君なんだ」と梶は云つた。
 「嘘よ。あなたぢやないの、あなたがいつも私をいぢめるんぢやありませんか、私、きつとあ

なたと結婚するまでにいぢめ殺されて了つてよ」
 「僕はあなたと結婚するまでに、きつと狂人になるでせう」
 「私、あなたにいぢめ殺されたら、幽霊になつて出て行つてよ。きつとあなたはもうそのときに私とちがつたお嫁さんを貰つてらつしやるんだわ。ああ憎らしい。私、もう死な／＼いわ」
 「僕は狂人になつたら、あなたの鼻を引つ搔いてやりますね」
 「あら、それは私ぢやないの。ね、私、猿を飼つてもよくつて。あなたの鼻を引つ搔かせてやりますの。面白いわね／＼どんな顔になるでせう。結婚式に鼻に繃帯して來なくちやならないわ」
 「町子さん、あなたは結婚式のとき僕にどんな指輪をくれるんです？」
 「猿のついた指輪にませうか。よくつて？」
 「ぢや、僕は犬のにませうね。待ち給へ。ちよつとその場面をこゝで練習しときませうか」
 「何に？」
 「いや、その指輪を交換する場面をです」
 「まア、あはてんぼねえ」
 「でも今から練習しておかないと羞しくつてやりきれませんよ」
 「さうね。羞かしいわね、私逃げちやいますわ」

「だから、練習が必要だと云ふのです」

「だつて、今だつたら人が見てゐないから、羞かしかアなくつてよ」

「何ならホテルの人皆呼んで来てでもいい、ですね」

「練習をするから見に来て下さいつて云ふの」

「まアさう云つた形式です」

「ぢや、さあ、あなたさう云つて来て下さいな」

「もしさういひに行くことが出来るほど勇氣があれば、何もわざ／＼今頃から練習なんかしなくつてもいいわけですね」

「さうれ、ごらん下さいな」

「いや、それより一寸待ちたまへ、あなたは僕の顔をよく見てゐるんです、いゝですか？」
急に梶はあらたまつた調子で云ひ出した。

「いゝですね」

「ええ」

町子は何事かと思つて梶の顔を見詰めてゐた。梶は町子を見詰めながら、自分の頬を自分の片手で抓りはじめた。

「それ何アに？」と町子は訊いた。

「あなたは頬つべたが痛かありませんか？」

「ええ、何んともないわ、どうして？」

「ぢや、駄目なんだ」

「何が駄目なの？」

「結婚式をやる價値がないのです」

「どうして？ 私の頬つべたが痛かなくつちや結婚式が出来ないの？」

「つまりさうなんです。僕が僕の頬つべたを抓つただけで、あなたもあなたの頬つべたがそれだけ痛さを感じなければ、妻たるものの價値がないのです」

「あらまア」

「いや、夫婦の種類には幾つもあるのです。一流の夫婦、二流の夫婦、三流、四流とあるのですよ。つまり一流の夫婦と云ふのは最も高い強い美しい精神の結合した夫婦の意味で、さう云ふ夫婦は精神的な苦痛は無論のこと肉體的な苦痛も共感するものなんですよ。それでなければ結局どんなに仲が良くつても二流の夫婦に過ぎないんです」

「ぢや私ら何流の夫婦なの」と町子は訊いた。

「それは云はない方がいいですね」

「二流だなんて、そんなこといやだわ」

「だつて一流にはなれないんですから仕方がない」

「ぢや、あなた、私の顔を見てゐらつしやいな。よくつて？」

「あなたが抓つてみるのですか」

「え」

「宜しい」と梶は云つた。

町子は梶の顔を見詰めながら自分の頬を抓り出した。

「痛くつて？」

「痛い」と梶は云つた。

「嘘よ嘘よ、痛かないんだわ」

「どうして分りますか？」

「そんなこと痛かないに定つてるぢやありませんか」

「所が、一流の夫婦になると、僕が嘘云つたつてすぐ分るんです。もつとも一流の夫婦は嘘も

云ひませんがね」

「ぢやあなた、痛くもないくせに痛いなんていつて、嘘を仰言つたわ。一流の夫婦ぢやないん

だわ」

「いや、僕だけが痛さを感じてもあなたに感じられなければ、いづれ僕の痛いと言つたのも嘘

なんですよ。一流の夫婦なら、一方が感じて一方が感じられないつて筈がないのですからね。

だから、嘘だとか嘘ぢやないとかそんな問題が全然起し得ないんです」

「だつて、そんな夫婦なんて本當にありやしないわ」

「いや、われ／＼二流三流の夫婦には、そんなことが理解出来ないんです。さう云ふことが感

じ得られないんだから、嘘だと思ふより仕方がないんです」

「ぢや、あなただつて嘘だと思ひになつてゐるんでせう」

「いや、さうなることを願つてゐるものなら、嘘だと思つても、嘘と思ふことが、間違ひだと

思ふやうになるんです」

「それなら私だつてさうなりたいわ」

「もつとも僕もさうなりたい」

「さうしたらいいわね」

「そりやもう」

「どうしたらそんな夫婦になれるんでせうね？」

「それは僕にも分らないのです。非常に優れた愛が進んで行つたならさうなるといふのです。人間はそこまで行くべきやうに造られてゐるのですね。さういふ夫婦は世界の中で一世紀に二三組より出ないらしいのです」

「まア、本當？」

「近頃の中ではアイヌの中にさういふ夫婦があつたといひますね。妻が出産するとき、良人は七轉八倒して妻と同じ肉體的苦痛を感じたと云ふことは僕も聞きましたよ。さう云ふ二人はどれほど遠くに離れて別々に旅行をしてゐても、お互の苦痛や喜びを同じやうに感じ合ふことが出来るのださうです」

「まア」

「そこで僕達はどんなに近くにゐるときでも喧嘩ばかりしてゐると云ふのです」
「いやだ」

「いやですわね」

「あなたが悪いんだわ」

「君だよ」

「あなたよ」

「成る程、もう喧嘩をしましたわ。どちらが悪いんです？」

「ね、あちらへ行きませうよ」

町子は梶によりそつてまた花壇の方へ歩き出した。彼女は不思議な感動を覚えて深く溜息をついた。

「ね、あなた、そんな夫婦だつたらどんなにいいでせうね」

「しかし、あなたは僕の鼻を猿に引つ掻かす筈でしたわ」

「もうそんなことは仰言らないでね」

「あゝ、たゞさう云ふことをされては痛くつて溜りませんよ」

昭和四年七月十日印刷
昭和四年七月十五日發行

新進傑作小說全集 第四卷

(第四四配本)

(品賣非)

著者 橫光利一

發行者 下中彌三郎
東京市麹町區下六番町一〇

印刷者 濤川薰
東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麴町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番
株式會社

平凡社

電話九段 三三一
六四六
四七六
七五四
番番番

本製 田 岩

行印部刷印社凡平社會式株

569
157

